
イグドラシルの種

みやひろかず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イグドラシルの種

【Nコード】

N8042D

【作者名】

みやひろかず

【あらすじ】

はるか昔の大戦で死滅しかかった惑星。そこに現れた謎の怪物の正体は？

「イグドラシルの種」その1

昔々

それはそれは、むかしむかしのお話です。あるところに、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリという怪物が住んでおりました。その禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリはとても大食らいで、一人で国中の食べ物を食い尽くしてしまい、人々は泥をふるいにかけてその中から穀物のかけらを拾い出さなければならぬほどでした。

> ねえ、かあさん。どうしてそう長つたらしい名前を繰り返すの。それはね、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリは名前を間違われるのをとても嫌うからよ。きちんと呼ばないと、悪さをするといわれているのよ。

へー、それじゃ今も聞き耳を立てているってこと？
そうかもしれないわね<

あるとき、心のやさしい妖精鳥ペグは、人々の苦しむ姿を見ていられず、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリをイグドラシルのもとへ呼び寄せました。

そして「この世のものとは思えないほど美味しいものを食べさせてあげるから、ついていらっしやい」と言っつてイグドラシルの上のほうに飛んでいきました。

禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリは後を追っつてイグドラシルをするすると登っつていきました。そして、あつというまにてっぺんに着いた禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリに向かつて妖精鳥ペグは、太陽を指差してこう言いました。

「さあ食べてごらん。目の前に輝くこの世のものとも思えないほど美味しい食べ物」

しかし、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリは、眩しさのあまり目をつぶっていたため、それを太陽だとは判りませんでした。そこで、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たるペペルギス・タウタレリは、おそろおそろ右手を伸ばして探ってみました。すると、えも言われぬ良い匂いが漂ってくるではありませんか。

実は、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリの右手が焼け焦げる匂いだったので、鈍感な禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリは気がつきません。

匂いに気をとられた禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリがもつと手を伸ばしてあたりを探ってみると、右手が太陽にあたりました。そこで、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリは、ここぞとばかりに太陽の一部をもぎ取ると大慌てで口に放り込みました。するとどうでしょう、口の中に広がったのはこの世のものとも思えないほど美味しい味ではなく、この世のものとは思えないほどの激痛でした。

そのまま禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリは体の中から太陽のかけらに焼かれ、黒焦げになって落ちて行きました。そして地面にぶつかり、粉々になって国中に飛び散ってしまいました。

それ以来、禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たる、ペペルギス・タウタレリの破片から生えた草で人々は飢えることはなくなつたということです。

モナが目を覚ますと、涙が頬を伝わっているのに気づいた。もう長い間見ていなかった母の夢。その感傷にもう少し浸っていたかったが、先ほどからしている物音の正体を確かめようと、寝ていた

工具棚の上から半身を起こして暗闇に目を凝らした。

その音は何かを袋から掻きだしているような音だった。人の影が動いている。誰かが入り込んできて食べ物をあさっているらしい。と、その動きが止まり、こっちへ振り向いた。キラキラと輝いた目がこちらを睨んでいる。

ペペルギス・タウタレリだ。モナは根拠も無くそう思った。思った後で、きちんと名前を言わなかったのに気が付いた。

が、時すでに遅く、もうそこに居るのだ。

「イグドラシルの種」その2

滅び行く惑星

この星は死にかけていた。

千年以上前の世界大戦で使用された超兵器によって、大気の大部分が剥ぎ取られ、直接降り注ぐ太陽光線に焼かれた地表は砂漠と化し、海は干上がったいた。

残された数千人の人類は、強烈な太陽の光から逃れるために、直径500m深さ1000mの巨大な縦穴の底に暮らし、その絶滅の時をただ手をこまねいて待つだけだった。

人々に残された生活圏の巨大な穴は、大戦前にパルム鋼と呼ばれる物質を掘っていた鉱山跡で、もともと海底だった場所だ。海の中に巨大な囲いを作り、その中の海水を汲み出してから露天掘りをするという思い切った方法で作られた鉱山である。

海底で見つかったパルム鋼は、夢の新物質と呼ばれ、さまざまな用途に用いられた。

しかし、宇宙起源と推測されるパルム鋼は他の場所では見つからず、鉱山の場所が地理的に微妙な位置にあつたため、世界大戦を引き起こしてしまったのである。

残された人々は、穴の奥底に残るパルム鋼を使って細々と生き長らえていたのだった。

父、ゼクタ

夜が明けた。灼熱に燃える朝日によって、地上に残る隔壁の残骸が穴の反対側の縁にまだら模様の影を落としていた。

その影の中に動くものが有った。それは人の背丈の二倍は有るダチヨウのような機械で、

二足歩行式のパワーシヨベルだ。そのパワーシヨベルを先頭にして整備士達が歩いている。彼らは夜間作業を終えて、家路に着く所だった。整備士は、この穴の人々の生活を支える施設を整備する人たちで、外気取り入れ口、光導入ミラー、等の地上に出ている施設の整備は、強烈な太陽光を避けるため夜間行われる。しかし、千年以上前に造られた機械類は、かなりガタが来ており、まともに動くようにするだけでも相当の努力と忍耐が必要だった。今日も作業が遅れ、彼らの顔には疲労の色が濃い。

穴の上下を結ぶ交通手段として、穴の周囲を螺旋状に走る列車がある。その上の駅に着いた彼らは、おのおの装備を列車に運び込んだり、残しておく機械類の後かたづけを始めた。

さきほどパワーシヨベルを運転していた男はゼクタといって、整備士仲間ではメカの扱いが一番うまい男だ。

ゼクタはパワーシヨベルを所定の位置に戻すと直ぐに自宅へ電話をかけた。昨日、出がけにお置ききとして倉庫に閉じ込めてきた娘のモナのことか心配になったのだ。

母親が死んでからは苦勞をかけ、独立心旺盛に育ったのはよいのだが、危険だから大型エレベーターは使っな、という言いつけを守らず、工作機械を運んでいたのがばれたのである。

ゼクタは、命に関わる事なので倉庫の中で反省させるつもりだった。が、仕事のがのびて、思っていた以上長い時間閉じ込めることになってしまったので、お腹を空かせているのではないかと心配になったのだ。

「もしもし・・・」ぼそぼそと元氣のない声で弟のセリが電話口に出た。

「セリか？起きていたのか」

「うん・・・」

「いつも言っているが、もっと八キ八キしないとだめだぞ。姉さんはどうしてる」

「まだ・・・」

「そうか、まだ中だったな。で、どうだった、反省している様子はあったか？」

「ずっと寝てた・・・」

セリも心配で、夜中何度も様子を見に行ったのだろう。お仕置きがないの姉である。

「そうか・・・。私が帰るまで倉庫から出すなよ。ただし、朝食は持っていてやれ」

「うん」

言うより早く電話が切れた。こういう時だけ素早い。ゼクタは苦笑しつつ受話器を置いた。

同僚の呼ぶ声がある。列車が発車するらしい。ゼクタは列車のほうに向かいながら、子供達の教育のことを考えていた。

「イグドラシルの種」その3

倉庫の中

ゼクタの家は縦穴の中腹にあいた亀裂の中にある。いくらか空気が薄く、人が居住できる限界に近いのだが、仕事柄地上との往復が多いので自然と住み着くようになったのだ。

ドアを勢いよく開けて、バスケットを持ったセリが出てきた。どうやら電話が来る前に朝食は出来上がっていたらしい。十歩も歩かないうちに倉庫の扉の前に着くと、のぞき穴から中をのぞいてみる。しかし夜が明けて辺りが明るくなつたとはいえ、光が入らない倉庫の中はよく見えない。声を掛けてみても、まだ寝ているのか返事がなかった。姉がそんなにネボスケでないことを知っているセリは、心配になつて鍵を開け、中を覗きこんでみた。

セリがもう一度姉の名を呼ぶと、ガタカダと何かが奥のほうへかけて行く音がした。不審に思つて中に入り音がした方を伺つてみる。もう一度声を掛けようとしたとき、セリは急に後ろから羽交い絞めにされて口を塞がれ、手に持ったバスケットを取り落としてしまった。

「しーっ、静かに」モナだった。「いいこと、声を出しちゃだめよ」口を塞がれたままうなずくと、やっとモナは手を離れた。セリが暗闇になれた目で辺りを見回すと倉庫の中がめちゃくちゃに荒らされている事に気がついた。

「何があつたの・・・」

「ペペルギス・タウタレリよ」

セリは、その場に凍り付いてしまった。怪物が出現したことにではなく、姉が禁を破って禍禍しき厄災の息子にして破壊の神たるペペルギス・タウタレリの名前を短く言ってしまったことに対してショックを受けたのである。

「姉さん！」

「いまさら言っても遅いの。それより、どうしたらいいと思う？」

モナはそう言いながら、さっきセリが落とした食事を拾い集めバスケツトに放り込むと、倉庫の奥のほうへ進んでゆく。

「どうするの、ねえ、どうするの」

セリは、姉の様子をうかがいながら恐る恐るついていった。

奥へ

倉庫の奥に行くと、立てかけてあった鉄板が引き倒され、ぽっかりと黒い穴が開いていた。ここからあの怪物が入り込んだのだろう。ここは倉庫といっても、横穴に蓋をしただけの簡単なつくりの為、抜け道が結構あり、鉄板でふさいでおいたのだった。

「ねえ、どうするの」セリがもう一度聞いた。

「あいつをやっつけるのよ」

「！」セリが声のない声をあげた。

「いい、お父さんと呼んできて」

セリは、ただ首を振るだけだった。

「まだ帰ってきてないのね。じゃ、なおさらあたし達で何とかしない！」

「でも……」

「いい、この食べ物であいつをおびき出して上まで連れ出すの。そしたらあいつは太陽に焼かれてしまうわ。」

モナはセリの顔を覗き込んだ。その顔にはありありと恐怖の表情が浮かんでいる。

「ついて来なくってもいいのよ。」

そう言うとモナは穴の中に入っていった。

中はよりいっそう暗い。隙間から幾らかの光が忍び込んでくる倉庫と違い、まったく光が射さない穴の奥は、さすがのモナでも怖気づいてしまう。

その恐怖を振り払うために、モナはさっきの怪物のことを考えてみた。とっさにペルギス・タウタレリと思っただけれど、本当にペルギス・タウタレリなのだろうか。ペルギス・タウタレリの本当の姿は母のお話からでは正確には判らないのだ。でも、大きく裂けた口、爛々と光る目、両手は前にだらんと落として手の甲を引きずっている、あの姿はペルギス・タウタレリに間違いない、と思う。壁を手で探りながら進める足が止まっているのに気づいたとき、モナははっと息を呑んだ。穴の壁に巨大な影が映りこんだのだ。

「おねえちゃん・・・」

セリの手にした懐中電灯が、モナの背中から光をあて、その影が浮き上がっただけのことだった。

「驚かさないでよ！まったく。」

モナは動揺を隠すため、勢いよく弟の手から懐中電灯を奪い取ると、洞窟の奥を照らしてみた。動くものは何も無い。

「せっかく明かり持ってきてあげたのに・・・」

「いいから、ついていらっしやい。」

お互いの心細さをそれぞれ悟られまいとするように、二人はギョッと手をつないで奥へと歩いていった。

「イグドラシルの種」その4

遭遇

奥のほうに赤い光が見えてきた。どこか広い場所に出るようだ。

モナは赤い部屋の入り口付近で身を伏せた、セリも慌ててそれに従う。

いた、あの怪物だ。

その部屋は高い天井から赤い光が降り注ぎ、床一面に野菜が作られていた。野菜工場だ。この光は地上に降り注ぐ太陽光線を光導管で引き込み、有害な波長をカットしたもので、植物の生育に良いように調整されている。こういった施設は地中の各地に作られ、穴の中の生活を支えていた。

あの怪物はその中央に立って、ぼーっと上を見上げている。

「何してるんだろう・・・」誰に言うでもなしにセリが呟いた。

モナはもう一度良く観察してみた。怪物の色は真っ黒。でも赤い光で野菜も真っ黒に見えるのでたぶん緑だろう。ボサボサに伸ばした髪の毛は今にも地面に届きそうだ。

モナは上に続く階段があることを確認すると、怪物に見つからないように、近くの岩に移動して身を隠した。そして、さっき拾い集めた食べ物を袋に詰め、口を縛り紐を結びつけると、投げ縄の要領で振り回し始めた。モナが紐から手を離すと、袋は一直線に怪物のほうへ飛んでいく。

手前に落として、怪物の注意を引き、誘い出そうと考えたのだが、力みすぎたのか袋が怪物の背中に当たってしまった。

怪物は、振り返ってじーっとこちらのほうを見つめている、モナは立ちすくんでしまつて身動きができない。セリは慌てて姉の服を引っぱつり、隠れていた岩の後ろに引き込んだ。

モナは落ち着こうと深呼吸をした。そして、手に紐を持ったま

まなのに気づいた。そろそろと手繰り寄せるとビリビリに引き裂かれた袋が戻ってきた。

作戦失敗。はあーとため息をついたとたん岩の上に何か飛び乗る音がした。二人が上を見上げると怪物が口をもぐもぐさせながら覗き込んでいる。

二人は見上げたまま動くことができなかった。ただ怪物のくちやくちやという食べる音だけが響いている。

やっこのことモナが「いい、向こうの出口まで走るわよ!」と言うが早いか、セリの手をつかんで脱兎のごとく駆け出した。しかし、二人の走る速さが違うため、階段の手前で二人して転がってしまった。モナが頭を上げたとき、怪物はセリに飛びかかろうとしていた。「ダメー!」

大きな声に驚いたらしく、怪物はピタツと動きを止めモナの方を見ている。その隙を突いてセリは姉の下に這いよってきた。

「何か食べ物はないの」

「飴なら・・・」

「かして!」モナは受け取った飴の袋からひとつ掴み出すと地面に置いた。そして、二人はそろそろと後ずさりしながら階段を上って行った。

追走

「どう、ついて来ている?」

「たぶん・・・」

モナは、扉を開けようとしていた。そこは光導管が上に伸びている通路への入り口で、開放型の大型エレベーターに出るにはこの通路を通らなければならないのだ。

「見えてきて」

「嫌だよお・・・!」怪物が廊下の角から顔を覗かした。

「来たよ!」

「開いたわ、さ、入って」

モナは弟を先に行かせると、扉の前に飴を一個置いて怪物のほうを見た。

「さあ、ついてらっしゃい」

ここに来る間も何度か繰り返されたそれは、まるで儀式のようだった。

怪物のほうも何が気に入ったのだろうか、けして襲ってこようとせず適度な間合いを取ってついて来る。

通路はかなり急な坂になっていてうえ滑りやすいので、手を使わなければ登れなかった。ただ通路といっても、直径2メートルほどの光導管の上の隙間が通れるようになっていて、足下からポヤーツとした光が洩れている。本来は洩れることは無いのだが、蓄積した不純物の微かな乱反射がちょうど良い灯りの代わりになっていた。

モナは光導管の縁に手をかけながらしばらく登っていたが、怪物がついてこないことに気が付いた。体勢を立て直してもっとよく見ようと体を返したとたんバランスを崩し滑りだしてしまった。

「おねえちゃん！」

セリの叫びも空しく、ずり落ちてゆくモナの目に怪物の頭が迫る。と思うまもなく、モナは怪物の頭に乗り上げるようにぶつかって止まった。怪物が下を向いていたので、比較的柔らかい髪の毛がクツシヨンになり何とか大事には至らなかったようだ。

「いたたたた」それでも痛かったらしい。が、怪物はそんなこと意に介さず下を向いたままだった。

怪物に食べられてしまうかもしれないと考えていたモナは、不思議に思い、怪物の頭から降りて顔を覗き込んだ。光導管から洩れてくる光に照らされてより不気味に見える怪物の顔はどこか寂しげだ。

そのときモナは怪物のもじやもじやの髪の毛の下、額の辺りに目があることに気が付いた。

三つ目の怪物？ペペルギス・タウタレリが三つ目という話は聞

いたことが無いわ。

そう思ったとき、モナは顔を上げた怪物と目が合ってしまった。食べられると思った瞬間、怪物は「ブオー」と大きな声で吼えた。

モナは慌てて管を駆け上り、真っ青な顔をした弟の側までたどり着いた。

「何があつたの」

「だいじょうぶ、だいじょうぶよ」

「あっ！」

怪物がをもぞもぞしながら登ってくるのが見えた。

「急いで！」

モナは弟を押し上げるようにして通路を登りはじめた。

「イグドラシルの種」その5

風

二人は酸素マスクを着けた。まだ少し気が早いように思えるが、彼らが今から横切ろうとしているのは酸素が少ない状態で強風が吹いているトンネルなのだ。地上の外気取り入れ口から吸い込まれた薄い空気は長いトンネルを通るうちに圧縮されてから下の町に噴き出す仕組みになっている。

そのトンネルは直径が五〇メートルの半円形で一応人が飛ばさず通れるようにロープが張ってあるが、地面はゴロゴロ石が転がっており足を取られて転ぶと危険なのだ。

二人はロープにしっかりと掴まって抱き合いながら進んだ。モナは途中でうしろをふり返って怪物の動きを注意するのも忘れてはいない。

「ほんとにこの道で合ってるの」

「心配しない、お姉ちゃんを信用しなさい」

モナが振り返ると怪物は開け放たれたドアからこちらの様子を窺っている。風に怖気づいたのか入ってこようとしない。

「どう、付いて来る？」

「まだ判らないわ」

「風が怖いなんて、なんて臆病な怪物なんだろう」

「そうかしら、襲うタイミングを狙っているのかも」

セリが急に立ち止まった。

「この風であいつを吹き飛ばしてしまえばいいんだよ。そして早く帰れ・・・」

モナは弟が後ろを凝視しているのに気づきふり向いた。

居ない。あの怪物が消えてしまった。扉は開け放されたままだが

姿が忽然と消えてしまったのだ。二人はあたりをきよきよと見回した。が、怪物のすがたはどこにも見えない。

「逃げちゃったのかな」

「そんなはず・・・」

そのときズシヤ、ズシヤという音が風の音

の間から聞こえてきた。

「何の音」

モナは音のする方向を振り仰いだ。

なんと、あの怪物が天井から逆さにぶら下がっているではないか。ズシヤ、ズシヤという音は怪物の手足が天井に突き刺さる音だったのだ。怪物はどういうつもりか知らないが器用に天井をつたわってきたのだ。

急に怪物との距離が縮まったので二人は慌てて出口に急いだ。

が、風が強くて思うように進まない。へたをすると怪物のほうに先に着いてしまいかもしれない。後少しで出口というとき、二人の目の前に黒い影が上から落ちてきた。二人がもうだめだと思った瞬間、怪物の乗った丸石がグラツと揺れ、バランスを崩した怪物は風に吹き飛ばされゴロゴロと転がってゆく。二人は急いで出口の中に飛び込むとドアから様子を窺ってみた。

「やったね、思ったとおりあいつ吹き飛ばされちゃったよ」

「まだよ、来るわ」

怪物はさほど飛ばされなかったらしく、今度は地面に手足を突き刺しながらこちらへ向かってくる。

「行くわよ」

ここから先は一本道なのであの怪物が迷うことは無いだろう。

二人は駆け出した。

エレベーター

ゴウンゴウンと鈍い音を立てて開放式の大形エレベーターは上

っていた。このエレベーターは穴の壁面に取り付けられていて、昔は大型の機械を運搬するために使われていたが、今は古くなってあちこちガタがきているため使われていない。昨日モナが倉庫に閉じ込められる原因となったエレベーターだ。

怪物は台の先端に座り込んで空を見上げている。空といっても穴の下から湧き上がる湿った空気が途中で雲を作っているので、紺色をしている空はあまりよく見えない。怪物は何を見ているのだろう。やがてそれにも飽きたのか、傍らにモナが放り出した飴の袋を見つけるとぼりぼりと食べ始めた。

モナたちは手前のコンソールパネルの所に陣取り怪物の様子を観察していた。この大型エレベーターに誘い込んだのは良いが、上に着くまで飴がもつはずが無いことは解っていた。でもモナにはこの怪物が大人しくしているだろうという期待もあった。

「さつき外を見ている間におつこどしちやえは良かったんだよ」
「出来たと思う？出来たとしても安全網に引っかかってあいつは無傷よ。」

セリには返す言葉が無かった。

それにしてもあいつはいつたい？モナは考えた。

ペペルギス・タウタレリが三つ目だという話は聞いたことが無い。ペペルギス・タウタレリだとしても、あの怪物は倉庫の食べ物を食い散らかして、大声を出して私達を驚かしたりしただけじゃないの。太陽に焼かれるようなそんな酷い事はしていないじゃない。でも……、でも？何で悩まなくちゃならないの？

そのとき、怪物が「ブオー」と大きな声で叫びだして、頭をエレベーターの柱に何度も叩きつけた。モナとセリは何が起きたか解らずただ見つめるしかなかった。

怪物が思い切り頭をぶつけるので柱が曲がり、エレベーターは停止してしまった。それでも怪物が止めなかったのでついにエレベーターのレールが外れ床が斜めに傾いてしまった。モナとセリはココロと端っこまで転がると、なんとか手すりに引っかかった。そこ

から覗き込むと安全網は遥か下にあり、無傷と考えていた自分が甘かったとモナは思い知った。

そう、安全網は上から落ちてくる人を柔らかく受け止めるものではなく、上から落ちてくる岩を防ぐものなのだ。

「イグドラシルの種」その6

父

闇の中にボツと浮かび上がる人影があった。食事の支度をしているようだ。その後姿には見覚えがあった。妻のトルエである。その傍らにはまだ幼いモナが絵を描いて遊んでいる。声を掛けようとしたが声は出なかった。幼くして母を失った娘に対する後ろめたさが見せる夢だと解つていても胸が締め付けられる。ゼクタは今まで何度もこの夢を見た。モナが描き上がった絵を見せようと後ろを振り向くと、さっきまで食事の用意をしていたトルエが居なくなっている。慌てて辺りを見回し母を呼ぶがどこにも居ない。ゼクタは手を伸ばして娘を抱き上げようとしたが、スーツと遠ざかり、手は空しく空を切るだけだった。

列車の急ブレーキで目を覚ました時、ゼクタはもう駅に着いたのかと思った。しかし、窓の外を見てみると駅のホームにしては薄暗い。変だなと思い辺りを見回すと、前方の線路上に赤い信号が点いている。そのあたりに懐中電灯の光が交差しているのが見えた。

他の仲間達も、なんだ、どうした、と騒ぎ出している。

「よし、様子を見てこよう」

親方がそういつて列車を降りて行った。

近づいてきた人影になにやら文句を言っていた親方が「怪物う？」と素っ頓狂な声をあげた。

ゼクタは、怪物とは穏やかではないな、と思いつつ何人かの仲間とともに列車を降りると顔見知りの保安局員がこちらに走ってきた。

「ゼクタ、子供達がどこにも居ないんだ」

列車は齒車を軋ませながら勢い良くもと来た道を登っていた。

保安局員の話によると、昨夜遅く、炭鉱の奥で行方不明になっていた炭鉱夫キクリを捜索していると、全身緑色をして髪を振り乱した怪物が穴の奥から飛び出してくるのに遭遇したというのだ。怪物は、保安局員達の間をそのまま走り抜け消えてしまった。炭鉱夫仲間達は、キクリの服を着ていたとか、面影がどこか似ている、などと証言しているそうである。いくらなんでも、キクリが怪物に化けるわけが無かるうという意見が大半だったが、怪物を放っておくわけにもいかず人手を割いて穴の中腹まで追跡してきたところ、ゼクタの家の異変に気づいたということらしい。保安局員達は家の周りを捜索しつつエレベーターの所まで登ってきて、エレベーターが動いていることを知り、先回りするため列車を止めたのだった。

ゼクタは迷った、下に残り子供達の捜索に加わるか。それとも上まで行って怪物に捕らえられているかもしれない子供達を助けに行くのか。

結局、ゼクタは列車に乗っていた。

やがて列車は開口部にさしかかった。ゼクタは立ち上がり窓から顔を出して外を見た。そこから反対側のエレベーターを見ることが出来るのだ。

「あつ」

双眼鏡を覗いていた保安要員が短い声を上げた。ゼクタは双眼鏡を引っ手繰り覗いて見た。視界に広がったのは斜めになって崩れ落ちそうなエレベーターとその端に引っかかっている自分の子供達、そして緑色の怪物だった。

「モナー！セリー！」

ゼクタは窓から身を乗り出して叫んだ。すんでのところで後ろから羽交い絞めされて落ちずに済んだが、ゼクタはトンネルに入り反対側が見えなくなっても騒いでいた。

「止める、止めて降ろしてくれ。二人が二人が・・・」

「落ち着け。ここからではエレベーターには近づけないだろうが」

「落ち着けだどー」

保安要員の言うことも最もだが父親にとって冷静で居るといのが無理だろう。保安部員の隊長は無線機で下に残した部員に指示を送っていた。

やがて、列車が一周して再び開口部にさしかかると、エレベーターには誰も居なくなっていることが確認された。下からの連絡では、安全網に落ちた形跡も無かったということだった。

ゼクタはホツとしたものの、二人が怪物と一緒に居るだろうと思うと気が気ではなかった。列車が上に着くまで、彼はまんじりともせずに椅子に座って前方を見据えていた。

「イグドラシルの種」その7

エレベーター2

モナは弟をしつかりと抱きとめ落ちないようにするので精一杯だった。エレベーターの手摺は、モナにとっては高い位置にあって踏ん張りが利かないのだ。

そのとき、モナの背中を大きな手が掴んだ。と、見る間に二人は怪物の背中に乗っかっていた。二人が慌てて怪物の長く伸びた髪の毛を掴むと、怪物はするすると鉄骨の間を登っていく。

いつしか怪物は、非常階段を見つけてそこを駆け上っていた。踊り場に来るたび怪物はスピードを落とさず方向転換するため、モナは今にも振り落とされそうな弟を片手で支えつつ、怪物の髪の毛にしがみついていた。

やがて雲がかかっている所にさしかかった。雲の中に入ると怪物はバテてきたのかスピードを落とし、踊り場で立ち止まった。

穴の反対側の壁面に太陽の光があたり、雲を透かしてぼやっと白く光っている。その光を怪物が見ている隙にモナたちは怪物の背中から降りて体を伸ばした。力をこめて掴まっていたので体中がぎしぎし音をたてる。

モナは怪物の様子を探るため前にまわって怪物の顔を見上げた。

「危ないよ、お姉ちゃん」

「へーきよ」

覗き込みながらモナは思った。本当にこの怪物は悪者なのだろうか？

モナは自信が揺らいできた。

怪物は相変わらずボーンとした表情で反対側の光を見つめている。そのときモナは気づいた、怪物の額にあるものは目ではないことを目と想っていた場所から何か白いものが生えている。角？と思った

瞬間、その白いものがぐにゅと動くのが見えた。

怪物は再び大声を上げたかと思うと頭を柱に打ちつけ始めた。モナは何とか怪物の側から逃出し弟のもとへにじり寄った。

気温が上がってきたせいで雲が薄くなり反対側が良く見えるようになり始めると、怪物は頭を打ち付けるのを止めて再び階段を駆け上っていった。

二人は取り残された。

「行っちゃった・・・。ねえ、放っておこうよ」

「駄目よ。放つとけない」

セリは姉の正面に回りこむとじつと顔を見据えて言った。

「どうして！」

「だって、あのこはペペルギス・タウタレリじゃないんだもん」
セリは泣き出しそうになって。

「ペペルギス・タウタレリだって姉さんが言ったんじゃないか。

だから怖い思いをしてもついて来たのに。今さら違うだなんて・・・」

「ごめん・・・」モナは弟をぎゅっと抱きしめた。

「でもね、あのこは額に角があったの。ペペルギス・タウタレリにはそんなもの付いてないわ」

「そんなの解んないじゃん」

「怪物は私達を助けてくれたのよ。それこそ自分だけ逃げてしまえば良いのに」

「でも・・・」

「ごめんね。怖い思いさせちゃって・・・。でもあれはね、頭に角が生えてきて痛くて仕方が無いの。だからあんなことするのよ」

モナはしゃがみ込み弟の目を見つめて言った。

「だから助けていの・・・。セリはここで待ってて」

モナはそう言つと立ち上がり弟を残してエレベーターホールに向かつていった。

簡易昇降機

エレベーターホールに着いたモナは、緊急と書かれた扉を見つけてその中から得体の知れない機械を引きずり出した。それをズルズルと開口部へ引きずって行きテキパキと組み立てるとレールに挟み込んだ。

それはエレベーターが故障などで使えないときに使用する簡易昇降機だ。モナは父の目を盗んで何度か使ったことがあった。しかし大人が使うのを前提として作られているので、モナには扱いつらい安全ベルトは腋の下に潜らせなくてはならないし、操作盤は顔のまん前だ、しかも、足をかけるところと言えただの鉄の棒なのだ。前に使ったときは三階ぐらいしか昇っていなかった。が、今回は残り後五十階ぐらいだろうか、はたしてそれだけ長い間体力がもつか自信は無い。でも、先に登って行った怪物に追いつくには他に方法が無かった。

モナは再度各部分のチェックをして、安全ベルトを体に滑らせ鉄の棒に足を掛けた。

そして、やはり一人では心細かったのだろう一抹の期待を込めて振り向くと、セリが立って居るのが目に入った。モナが黙って手を差し出すと弟は小走りに駆け寄ってきて簡易昇降機に飛び乗った。

「イグドラシルの種」その8

上へ

簡易昇降機は騒音をたてながら昇っていく。

モナは弟を鉄の棒に跨らせて座らせた。上体はズボンのベルトを機械の取っ手に引っ掛け体に巻きつけた。そうすれば落ちることは無いだろう。

騒音のせいか、落ちないように必死な為か、二人は黙ったままだった。

やがて、無事最上階に着くと二人は飛び降り予備室へ向かった。予備室は外へ出る準備をする部屋で、頑丈な扉が危険な外界から中を守っている。怪物はまだ来ていない。

モナは非常階段に通じる扉を調べてみたが、硬く閉じたままだった。耳を押し当てて探ってみたが何も聞こえない。

ふと気が付くと怪物がエレベーターホールの開口部からもそそと入ってくるのが見えた。モナとセリがホールに着いたのを見て怪物は外壁を伝い登って追いかけて来たのだった。

怪物にとつて扉はもう既に意味をなさないのだった。

モナは慌てて怪物の前に立ちはだかった。セリも気がついてモナの後ろに隠れた。

「外へ出ちゃダメー！」モナの必死の叫びに怪物はきよんとして見つめている。

「いい？外は太陽の光があたっていてものすごく熱いのよ。そのまま出ると大火傷をしてしまうの。だから下へ降りましょう」

怪物はまだきよんとしている。

「お姉ちゃん、こいつ言葉がわかるの・・・」

「じゃ、どうすれば・・・」

そのとき怪物が二人の頭の上を飛び越えて外へと通じる扉に飛び

ついた。扉の鍵は暗証番号になっていて怪物には開ける事が出来ない。でも怪物は無理をして開けようとして扉をがんがん叩いている。

「だめ、開けちゃ」

モナは止めようとして近づいたが怪物の振り回す手にあおられて飛ばされてしまった。

「お姉ちゃん！」セリが駆け寄り助け起こす。

「大丈夫、たいしたこと無い」

そのとき怪物の手が止まった。と次の瞬間、踵を返すともと来たエレベーターホールへ向かって走り出した。モナとセリは慌てて後を追ったが間に合わず、エレベーターホールの開口部から出て行く怪物を見送るしかなかった。

「後を追うのよ」そう言うとモナは予備室へ走り出し、外へ出る扉の前まで来ると暗証番号を入れ開け始めた。

「防護服！」遅れてきたセリが防護服を引きずってきた。

「着てる暇ないわ」

「でも・・・」

「まだ日陰は残っているはず」

外界

予備室の扉が開いて二人が外へ出てきた。モナの言うとおり、かつて海水を隔てていた巨大な隔壁の残骸が影を落としていた。合間に行く筋かの日差しが洩れてはいたが、まだ気温もそう上がっていず、影の中なら何とか防護服無しで大丈夫なようだった。

怪物は壁をよじ登るのに力を使い果たしたのか、日なたへ向かってのろのろと歩いていた。

「まって、そっち行っちゃダメ！」

モナが怪物の長く伸びた髪の毛を引っぱって止めようとしたが効果はなかった。セリが加わっても、ただズルズルと引きずられるだけだった。

「お姉ちゃんもう諦めようよ」

「イヤ！この子は私達が酷い目に会わせようとしたのに逆に助け
てくれたわ。見かけと違って優しい怪物なのよ！」

そのとき、怪物が急に立ち止まって両手を高く掲げると「ブおー」
と大きな声で吼えた。モナが見上げると怪物越しに隔壁の端から
太陽の光が差し込み始めるのが見えた。

間に合わない、そう思った瞬間、何か巨大な腕が怪物を弾き飛
ばした。

モナたちは怪物の声に驚いて髪の毛を掴んでいた手を離してい
たため転んだだけですんだが、怪物は遠く飛ばされ隔壁にぶつかっ
て止まった。

「モナ、セリ無事か」

ゼクタが二人に声を掛けた。父は列車が上の駅に着くとすぐさま
二足歩行パワーシヨベルに乗ってかけつけ、怪物をそのアームでな
ぎ払ったのだ。

「父さん違うのあの子は・・・」

モナの言葉が終わらないうちにものすごい音がして隔壁が倒れて
きた。老朽化でボロボロだった上に怪物の激突が引き金となって倒
壊したのだ。

ゼクタは何とか二足歩行パワーシヨベルで支えようとしたが隔壁
が大きすぎてパワーシヨベルごと弾き飛ばされてしまった。

ゼクタはイスから投げ出された。たいした怪我は無かったようだ
だったが右足が隔壁に挟まれて動くことが出来ない。

頭を上げて子供達を捜すと二人がこちらに走ってくる。

「バカ、何やってるんだ。早く日陰に逃げ込め」

「だってー」

モナの言うとおり、辺りに隠れられる日陰はゼクタの元にしかな
かった。ゼクタは自分の着ていた防護服の上着を二人に掛けるとき
ゆっと抱きしめた。

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」モナはずっと

謝り続け、セリは泣き続けている。

ゼクタは背中が焼けてゆくのを感じた。せめてあと2、3分たてば保安局員が駆けつけてきて、子供達を助けてくれるだろう。自分の命と引き換えてでも二人を守らねば。

その時、ゼクタの後ろで大きな音がした。怪物が生きていたのか？振り向いて確認したくても、二人を庇ったままでは首を回すことも出来ない。そのうちゼクタは意識が遠くなっていた。

「イグドラシルの種」その9

双葉

保安局員の呼ぶ声にゼクタは目をあけた。助かったのか？背中は熱かったが我慢できないほどではなかった。子供達も無事助け出されたようだった。その時ゼクタは影の中にいることに気づいた。いつの間に影が？隔壁の残骸から助け出されたゼクタは子供達のもとに駆け寄ろうとしたが、二人が上を見て呆然としているのに気づくと自分も振り向いて上を見上げた。

そこには巨大な双葉が太陽の光をさえぎっていた。こいつの影のおかげで助かったのか。しかし、これはいったい……。そう思いつつ根本の方へ視線を落とすと怪物の足が地面と茎の間に挟まっているのが見えた。

モナはその巨大な植物の正体が怪物の額から生えていたものだと解ったのだろう、大きな声で泣き出した。

モナとセリが巨大な双葉を見上げてから、さまざまながあった。双葉はほとんど巨大な木に成長していき、現在は高さが30キロ半径30キロほどの半球状に枝を繁らせている。木漏れ日は人間が生活するのに程よい明るさを提供し、葉から吐き出される空気は地上にあふれ返った。

水は幹に穴をあけ管を通すと無尽蔵に湧き出した。人々は次々と地上に移り住み新しい生活を手に入れた。新しい環境の変化を拒む人々も、その木の根が穴の中にはり出すようになると渋々地上へと逃げ出した。人口もだいたい倍ぐらいになって人々の顔は笑顔を取り戻していた。そして人々はその木をイグドラシルと呼び、生えた年を零年として聖樹という新しい暦が作られた。

「かくして、ここに聖樹100周年記念祭を開くことが出来ましたことは、誠に喜ばしいことです」

空、といっても巨大な葉っぱのドームの下の空に、紙ぶきが舞っていた。人々の歓声が沸き起る。壇上に市長がのぼって演説をしている。今日は聖樹100周年記念のお祭りなのだ。

そのころ。

イグドラシルのドームを遥か離れた砂漠の真中に何か動くものがあった。その影が動きを止めるとしばらくして巨大な双葉がぬうつと伸び上がってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8042d/>

イグドラシルの種

2010年10月21日13時50分発行